

[調査研究]

東北大学所蔵【秋田家史料】伝豊臣秀吉所用「茶糺子地袴」について

長崎 巖

1. はじめに

2017年3月6日、東北大学図書館において、本論文の筆者である長崎巖と独立行政法人・東京文化財研究所研究員の菊池理予氏（現・文化庁文化財第一課 文化財調査官）及び共立女子大学大学院家政学研究所大学院生、川井結花子氏（現・共立女子大学博物館学芸員）の3名で、東北大学図書館所蔵の東北大学秋田家史料に含まれる本作品（『豊臣秀吉袴』 秋田家/82C/3）の調査を行った。その後、調書にあたる簡単な報告書は図書館に提出したが、図書館紀要に執筆の機会を得たので、改めて調査で分かったことを整理し、若干の考察を加えたものをここに紹介したいと思う。

2. 調査時における作品の状態

桐材と思われる蓋つきの木箱に、茶色がかった生地と薄紅色の生地、及び紅色の生地が畳まない状態で収納されていた（図1）。



図1 調査前の状態

箱の蓋表には「太閤様御袴」と墨書されており（図2）、蓋の右下に旧分類番号を示す「丙 A/1-11/82」と記す貼札と、秋田家史料としての請求番号を示す「秋/[C]/3」と記す札が貼られている。箱の短辺を構成する面の右上方にも、「丙 A/1-11/82」の札と「番外一/太閤様

御袴」と墨書する札が貼られている。また蓋裏には「昭〔和〕/32/3/30〔受入〕/和4/寄」と受入年月日を記す札が貼られている。



図2 収納箱

詳細に調査するために、箱に収納されているものを薄葉紙を敷いた机の上に出した結果、収納物は裏地付きの袴と用途不明の紅平絹裂であることが分かった。

袴自体は、はわずかに緑みを含んだ茶色の五枚糺子を表地に、紅平絹を裏地に用いて、袷仕立てに作っている（図3）。



図3 作品を広げた状態

破損が著しく当初の形状を必ずしも正確には推し量れないが、近世において「カルサン」と呼ばれた、南蛮風の袴に幾分類似した形状をなす。

現状で前腰裏地に6枚の襷を確認でき、表地にも同様に6枚の襷がとられていた可能性が高いが、表地の欠損が著しく、正確には確認できない。また外見上、裾口が太腿部に比して幾分狭くなっているように見えるが、これも表地の破損が著しく確認できない。なお、現状では、足首部分を括るための紐は見られない。

裏地の紅平絹は、経糸が2本ずつ寄った羽二重経になっていることと、横切れが著しいことから、経糸に生絹、緯糸に練糸を用いた練緯と考えられる。また表地は、鉄媒染による黒染めや茶染めに特徴的な破損状況を示している。同様の状況は、徳川家康所用と伝えられる胴服や陣羽織の裏地にも見られること、及び練緯が室町時代後期から桃山時代¹にかけての小袖や胴服、能装束の摺箔や縫箔に用いられ、それ以降の服飾にほとんど用いられないことから、この作品の伝承に鑑み、桃山時代の袴の現存遺品との比較を行うことが必要と考えられる。

桃山時代の袴の遺品としては、元和2年(1616)4月17日に死去した徳川家康の遺品の中に含まれているものが代表的である。家康の死後、駿府城に備蓄されていた家康の遺品は、第九子義直(尾張徳川家)、第十子頼宣(紀州徳川家)、第十一子頼房(水戸徳川家)に分与されたが、このうち頼宣に分与されたものが、現在は水戸の徳川博物館の所蔵品となっている。その中の白綾子地紗綾形草花模様カルサンは、安政2年(1855)に制作された徳川博物館蔵『東照宮御讓品縮図 水戸之分』に「御かるさん 白綾子」と記すもの、浅葱綾子地紗綾形草花模様カルサンは「御かるさん 浅黄綾子」と記すもの、白地菊桐唐草模様金欄カルサンは、「表白地金欄 模様菊桐唐草」と記すものにそれぞれ該当するが、これらの形状が茶縹子地袴に類似している。その形状の特徴は、脚部がほぼ筒状をなしながら、裾に近い部分でわずかに狭くなっていることである。

『東照宮御讓品縮図 水戸之分』は、同じく徳川博物館蔵の『東照宮御讓品御入記 水戸之分』をもとに描かれているといわれる。尾張徳川家伝来の『駿府御分物御道具帳』同様、水戸徳川家にもこれに該当す

る家康の遺品分与目録の写しが現存しており、「水戸之分」と「江戸之分」に分かれている。『東照宮御讓品御入記 水戸之分』は、「駿府御分物」の所在確認簿と見られ、「御讓品」(分与品)の名称は、この写しに基づいていると考えられる。このことから、『東照宮御讓品縮図 水戸之分』に描かれている袴、すなわち白綾子地紗綾形草花模様カルサン、浅葱綾子地紗綾形草花模様カルサン、白地菊桐唐草模様金欄カルサンは、元和初年頃には「かるさん」と呼ばれていたと推測され、これらと形状が似ている東北大学図書館蔵の袴も当時「かるさん」と呼ばれていた可能性が高い。

展覧会カタログ『家康の遺産 一駿府御分物一』(徳川美術館・徳川博物館、1992年刊)によれば、白綾子地紗綾形草花模様カルサンは丈81.0cm、浅葱綾子地紗綾形草花模様カルサンは丈65.1cm、白地菊桐唐草模様金欄カルサンは丈83.0cmとされているが、前出『東照宮御讓品縮図 水戸之分』では、白綾子地紗綾形草花模様カルサンは丈2尺6寸7分、浅葱綾子地紗綾形草花模様カルサンは丈2尺6寸4分、白地菊桐唐草模様金欄カルサンは丈2尺7寸4分と記されており、曲尺1尺を30.3cmとすると、浅葱綾子地紗綾形草花模様カルサンのみ、展覧会カタログ記載の法量はこれらとかけ離れている。今回調査した東北大学図書館蔵の袴の丈(腰紐の下から裾まで)は、左右の裾丈が85.0cm及び87.0cmで、『東照宮御讓品縮図 水戸之分』記載の三点のカルサンに近い。

また東北大学図書館蔵の袴は、裏地の紅平絹(練緯)に6枚の襷がとられていることから²、表地にも同様に6枚の襷がとられていたと考えられるが、上記の3点のカルサンにも前後にそれぞれ6枚の襷がとられている。

一方、これらと異なる点も見られる。腰紐の長さは前腰に付けられているものが長く、後腰に付けられているものが短い点は共通するが、東北大学図書館蔵の袴には、袴の長袴や半袴同様、後腰に腰板が添えられているのに対し、上記の3点のカルサンにはこれがない。

1 ここで言う「桃山時代」とは文化史において慣例的に使用されている時代概念で、徳川家康の死去までをひとつの文化期とする。

2 作品の破損が著しいため後面については確認できていないが、前面同様6枚の襷がとられていたと推測される。

3. 現状での法量

左裾丈（前腰から裾口まで） 85.0cm

左裾口幅 37.0cm

左脇あき（前腰から縫留まで） 47.0cm

左相引き（縫留から裾口まで） 38.0cm

左後腰から縫留まで 38.0cm

左右内股から裾口まで 60.0cm

右裾丈（前腰から裾口まで） 87.0cm

右裾口幅 35.0cm

右脇あき（前腰から縫留まで） 48.0cm

右相引き（縫留から裾口まで） 39.0cm

右後腰から縫留まで 42.0cm

右内股から裾口まで 60.0cm

前腰幅 32.0cm

紐 右紐 106.5cm 左紐 157.0cm 幅 2.0cm

後腰幅 28.0cm

腰板 幅 11.0cm 高さ 10.0cm

紐 右紐 86.0cm 左紐 89.0cm 幅 2.0cm

4. 腰紐の仕様と素材について

前腰と後腰には、太く撚った木綿糸を平らに並べ、これを表地の共布で包んだ腰紐を付けている（図4）。



図4 腰紐

台形をなす後腰の腰当ての部分は、薄い正目の板を和紙で両側から挟み、これを芯として、表地と裏地の間に入れている（図5）。



図5 腰当部分の内側

腰当てのそれぞれ左右に上記の腰紐を挟み込むように付けるが、腰板の部分では、多くの木綿糸を合わせて作った一本の太い木綿紐で左右の腰紐を繋いでいる。

本袴における大きな特徴が、腰紐の芯に木綿糸を巧みに用いている点である。江戸時代まで中国や朝鮮から輸入されていた木綿は、江戸時代前期に国産化が進み、希少性が低下したことから、以後、上流武家の日常の衣類にはほとんど使用されなくなった。ただ使用に強度や耐久性、保温性などが求められる道中合羽や馬乗り羽織には用いられた。このことは、木綿が本来持っている実用性を反映したものであり、戦が日常茶飯事であった桃山時代においては、その実用性において木綿は大いにもてはやされたであろうことを推測させる。

(1) 吸水性に富む、(2) 濡れると10～20%強度が増す、(3) アルカリや熱に強い、(4) 染色しやすい、(5) 弾力性、伸張性に富む、(6) 繊維断面が中空構造のため、軽く保温性に富み肌触りが良い、などの特性がある木綿は、戦場で過ごす時間が長かったこの時代の武家にとって非常に有益な繊維素材であり生地であったため、戦場や陣中、または移動中に着用する衣類に適した繊維素材であった。

文禄年間（1592～1596）頃には大量の木綿の種が大陸から輸入されていたともいわれるが、実際に国産の木綿を用いて仕立てられたと考えられる桃山時代の遺品は皆無に近いことから、栽培に成功して木綿が大量に生産されるようになったのは、やはり17世紀後半以降とすべきものと思われる。桃山時代から江戸時代初期においては、木綿は実用的ではあるが希少な素材であったことから、武将クラスの上流武家にあつては、まずは自らの生死を左右する戦衣や、これに準じる活動的な衣服に木綿を用いたと考えられる。

このほかにも木綿を袴の腰紐の芯に用いた江戸時代

初期の作品が現存している。林原美術館所蔵、岡山藩池田家伝来の服飾類に含まれている韋製の裁付袴は、一具をなす韋製の胴服及び頭巾とともに池田光政（1609 - 1682）所用と伝えられるもので、戦国の記憶を残す時期に制作されていることから、仕立てなどにも古様を残していると考えられる。この袴においては、木綿糸を合わせた紐ではなく、木綿の裂を、本袴同様、共布で仕立てた腰紐に芯として用いている（図6）。



図6 林原美術館所蔵・韋製裁付袴の腰紐

島根県立石見美術館所蔵の麻地裁付袴も腰紐の芯に木綿裂を用いている。室町時代から桃山時代にかけて石見（島根県の西部）の領主であった益田家に伝来したもので、麻地に柿渋を塗布し、刺し子を施した四幅袴。腰には共裂の腰紐を付けるが、腰紐には浅葱地小紋染の木綿布を芯として入れている（図7）。

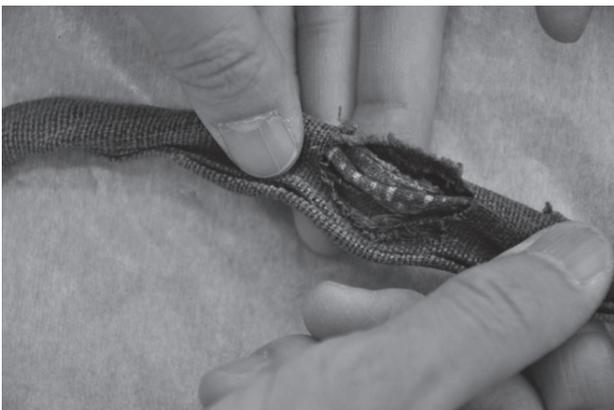


図7 島根県立石見美術館所蔵・麻地裁付袴の腰紐

また腰背面には木製の板を入れている。実用性の高い仕立てと刺し子による補強などから、桃山時代から

江戸時代初期に制作されたと考えられる。

これら2点は、袴の分類としては戦衣に分類される裁付袴であり、また木綿糸を合わせた状態ではなく、裂の状態で腰紐の芯に用いている点で、カルサンに分類されると考えられる東北大学所蔵の本袴とは異なるが、木綿を実用上重要と考えられる部位に使用している点で共通している。袴を長時間、また紐が緩むことなく快適に着用する必要がある場合に、木綿の芯が機能的にこの条件を満たしたのであろう。

木綿が希少であった桃山時代においては、高知県立高知城歴史博物館所蔵、山内一豊所用とされる紙衣陣羽織の襟に木綿裂が用いられているように、長時間の着用などの際に重要となる部分には木綿が使用されていたことがわかる。

5. 「太閤様御袴」の伝承について

駿府御分物に含まれる徳川博物館所蔵の3点のカルサンとの形状および仕立ての類似性に加え、裏地に練緯が使用されている点³や鉄媒染による茶染の破損状態などから、東北大学図書館所蔵のこの袴が、桃山時代に制作されたカルサンである可能性が強まったことから、次に文献上にこのような事例がないかを確認する。

徳川家康の言動を聞き書きした『玉音抄』⁴には、「一権現様大坂御陣之時御具足御着用無し白き御服にしゆすのかるさんをめす、かき色の御羽織、袖なし」と記されている。家康が、大坂の陣において、具足（甲冑）は着用せず、白地の小袖に縹子地のカルサンを穿き、柿色の袖無し羽織を着ていたというのである⁵。これにより、家康が縹子地のカルサンを所有していたことがわかり、桃山時代に、徳川博物館に現存する前述のカルサンに準ずる形状と仕立てで、かつ縹子地のものが存在していたことがわかる。

時期は前後するが、文禄3年（1594）、豊臣秀吉が武将たちの長期にわたる肥前名護屋での駐屯の気晴らしに仮装を行う遊興を瓜畑で催したが、その際の武将たちの仮装の様子を小瀬甫庵著『太閤記』巻十五、「秀吉公異彩の御出立にて御遊興之事」には、「出立ハあらましきひろ袖のゆかた、しゆすのかるさん、なんぼんづきんをかふつて」と記しており⁶、縹子地のカルサンが

3 『家康の遺産 一駿府御分物一』によれば、徳川博物館所蔵・白地菊桐唐草模様金襴カルサンの裏地は紅平絹とあるが、これは練緯である可能性が高く、この点でも類似している。

4 跋文に「右大神君御言ん故名玉音抄依家記抄出之以献上焉享保年月日林大学頭」とある。大学頭は昌平坂学問所の長官。元禄

4年（1691）林信篤（鳳岡）が任命され、以後代々林家が世襲した。近藤瓶城編『史籍集覧』第17冊、近藤出版部所収。

5 袖無し羽織を着用していることなどから、慶長20年（1615）の大坂夏の陣と考えられる。

6 『改定史籍集覧』第6冊所収。

桃山時代に存在していただけでなく、秀吉がこれを着用することがあったことが分かる。

豊臣秀次の右筆駒井重勝（永禄 11 年 - 寛永 12 年）の日記、『駒井日記』巻下に、「一従大閤様黄也段子御用候とて取に來御かるさん御手掛かけのおほひ被遣并晩に及黄段子四きれ被遣」と見え⁷、カルサンと手掛かけの覆いに使用するために黄色の緞子を求められた事が記されている。

江戸時代の秋田藩家老・梅津政景の日記である『梅津政景日記』慶長 17 年（1612）月日の条には、「木綿たうふく一ツ、同あわせ壱ツ、同かるさん壱ツ、てのこひ（手拭）二ツ」とある⁸。裏地の付いた袴のカルサンであることのみ知られるが、上記『駒井日記』の記事と合わせると、『太閤記』に見られる秀吉が着用した「しゅすのかるさん」も袴仕立ての表地に縹子を用いたものであったと推測される。

6. まとめ

以上考察を進めてきたが、本袴の染織品、服飾品としての特徴からは、その制作年代を桃山時代と推測することができる。また豊臣秀吉所用との伝承については、制作年代と同時期の類似作品、加えて文献資料における秀吉とカルサンとの関係性から、その可能性を受け入れることができる。

現状では損傷が著しいが、このような貴重な文化財であることに鑑み、早急の保存措置が講じられることを期待したい。

（ながさき いわお、共立女子大学博物館長・
共立女子大学家政学部教授）

【付記】本稿は、秋田家史料『豊臣秀吉袴』（秋田家 / 82C / 3）の適切な取り扱い方法を検討するため、東北大学附属図書館情報サービス課貴重書係の依頼により、平成 29 年 3 月 6 日調査に基づき御執筆いただいたものです。厚く御礼申し上げます。今後は慎重に研究活用に供しつつ、より適切な保存に努めます。

（東北大学附属図書館）

【秋田家・秋田家史料参考文献】

「秋田家文書」奥羽史料調査部 （文化 9-9 1942 年）

「戦国武将「安倍実季」とその子孫」江幡仲衛

（東海女子短期大学紀要 3 1971 年）

『東北中世史の旅立ち』大島正隆 そしえて 1987 年

『秋田家史料目録』東北大学情報シナジーセンター学術情報分室学術情報研究部編 東北大学附属図書館 2001 年（東北大学附属図書館所蔵古文書目録シリーズ 2）

秋田家史料は、東北大学デジタルコレクション

https://www.i-repository.net/il/meta_pub/G0000398tuldc で検索
ができ、一部は画像を公開している。

7 『改定史籍集覧』第 25 冊所収。

8 『大日本古記録』第 1 冊所収。